

Hofmannさん（薬物化学研究所、スイス）の貢献の紹介に続いて、著者自身とこの人びとと菌との出会いが語られる。この際ベニテングタケが主体である。ある章は既刊の文の再録であり、ある章はワッソンさんの文献の日本訳である。著者はこの書の出版で採算がとれるとは全く思っていない。とにかく書いておきたいという思いでなされているようである。聞く所によると、「新生物妖異考」や、「仏跡巡礼紀行」「世界の影絵芝居」「アダムとイブ」も出来上がっているという。

（津山 尚）

□Wagner W.L., Herbst D.R. and Sohmer S.H.: **Manual of the flowering plants of Hawaii**, 2 vols. (Bishop Museum Special Publication 83). 1,853pp. 1990. Univ. Hawaii Press & Bishop Museum Press, Honolulu. \$85. ハワイ諸島は大陸から遠く隔った海洋島であり、そのフローラは固有種が多いことで有名である。ハワイ諸島の植物誌としては Hillebrand (1888) の *Flora of the Hawaii Islands* があるが、本書は約 7 年をかけてこれまでの知見を整理し、必要と考えられた分類群については新たな調査・研究により分類学的再検討を加え、ハワイ諸島に生育する顕花植物を明らかにしたものである。本書で扱う地域はミッドウェイ島近くのクエ環礁よりハワイ島に至るハワイ列島であるが、このうち最東南部に位置するハワイ諸島と呼ばれる 8 つの島で 99.9% の面積が占められ、植物の種数もこれらの島に集中している。構成は、序文（概要、地質、気候、植生）、本文（科・属・種への検索表、異名・英名・原地名、記載、生育地、分類上のコメント、用途）、用語解説、引用文献及び索引より成り、固有種を中心に約半数の種には線画が示されている。本書に挙げられた植物はハワイ列島に生育する、又は生育していた 1,817 種であり、このうち古くからの

自生種は 956 種、うち 89% のものが固有種である（分類群としては 1,094、うち 91% のものが固有）。著者らの他に執筆者として、アメリカを中心にヨーロッパの他環太平洋地域より計 55 名の研究者が参加し、日本からは大橋広好氏が *Desmodium* 属を担当されている。本書の最大の特徴は、全体にわたって分類学的再検討を行い、従来充分には扱われていなかった帰化植物も網羅したことであるが、記載にはこれまでに報告された染色体数が含まれ、しかもその材料がハワイのものかどうかが示されており、帰化と考えられる種ではハワイ諸島で最初に採集された標本が、又標本より描かれた線画では基となった標本が明示されているなど、細かく正確な情報を提供しようとする姿勢がうかがえる。一方、近年急速に関心が高まっている種の保護の気運を反映して、絶滅が心配される種には IUCN のカテゴリーに従いシンボルが付けられているが、ハワイ諸島に古くから生育する 1,094 分類群のうち、すでに絶滅したもの [Ex] : 107 (10%)、絶滅寸前のもの [E] : 139 (12%)、危険な状態にあるもの [V] : 39 (4%)、稀なもの [R] : 138 (12%) となっており、全体のうち 38% のものが絶滅もしくは絶滅の危機にあるという。これを属単位で見ると、例えば固有属でありかつハワイ列島における最大の属であるキキョウ科の *Cyanea* 属では 52 種 9 亜種のうち Ex: 16 種 1 亜種、E: 8 種 1 亜種、V: 2 種、R: 1 種 2 亜種となっており、限られた地域で多様に分化した植物の生存の困難さと保護の必要性が切実に感じられる。本書は、その扱う地域が島という明確に区切られた単位であり面積も四国よりも小さい程度という狭さや、固有植物が多くこれまで多くの研究者により調査が進められているという背景もあるが、現時点における世界でも最も進んだ植物誌の一つと言え、著者らが Manual と名付けたこともうなづける。 （三木栄二）